

2013 年度 FD 活動報告

フェリス女学院大学 FD 委員会

委員長（学長） 秋岡 陽

副委員長（教務部長） 藤本 朝巳

FD 活動は、計画的に実施すべきですが、一方で、大学内外の動きに合わせ、常時しかるべき修正を加えながら推進する必要があります。当大学においても、2013～2016 年度中期計画「主体的に学ぶ力の育成～学生を鍛える大学へ～」の実行にあたっては、当初計画に加え、大学院の FD として学位論文審査基準を作成し、またカリキュラム編成の趣旨を明示、全学科でカリキュラム・マップの見直し（バージョンアップ：以下「Ver.2」）に取り組むなど、着実に前進しています。大学院の FD は、自己点検・評価委員会からの報告を受けて具体化したものであり、カリキュラム・マップの見直しはカリキュラムの順次性、体系性をより明示する上で不可欠なプロセスとして全学的に取り組み、実現いたしました。

これらの計画を推進し、達成するために有効であったのは、現状の課題とその達成のために必要な要素を検討し、本学ですべきことを行動目標に落とし込み、完成予想図の提示などでゴールを共有することでした。また、提案に際しては先行する他大学等の取り組みや各研究を紹介し、さらに評価項目との関係などを積極的に発信し、情報共有に努めたことも奏功したと考えています。

中期計画初年度の FD 講演会（10 月 30 日（水）：「学生が成長するプロジェクト学習～初年次教育と PBL～」）は、多くの教職員の関心を集めました。その理由として、FD 活動の重点項目と合致したテーマであったことや、本学での導入・発展の可能性が大であること、などが挙げられます。

FD 活動の推進には「本学に合った仕様にカスタマイズすること」「それを効果的な方法で表現する」「なぜそれが必要なかをわかりやすく説明する」という翻訳作業、コミュニケーションが欠かせません。そのためにも、本学のあるべき姿を直視し、追求していきたいと考えています。

研修として参加した「ファカルティ・ディベロッパー養成講座 in 京都」（10 月 4 日（金）～6 日（日）／主催：愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室）では、改革や見直しを後押しする手がかりを得ることができました。特に授業アンケートについては、方向性を見定める上で重要な示唆をいただきました。先進事例に学ぶだけでなく、今後も、失敗や反省点も含め情報を公開し、改善のサイクルを回していきたいと思えます。

目次

1. 学修行動調査
2. カリキュラム・マップのバージョンアップ
3. FD 講演会「～学生が成長するプロジェクト学習～初年次教育と PBL～」
4. 大学院の FD をまずはここから
 - (1) 学位論文審査基準
 - (2) カリキュラムの説明
5. 専任教員による授業参観ポイント
6. 授業アンケートの目的は何か
7. セミナー参加報告
 - (1) 平成 25 年度 FD 推進ワークショップ（専任教職員向け）：学生の学びを促す学修支援と FD・SD～教職協働による大学教育の質的転換～
 - (2) 平成 25 年度 FD 推進ワークショップ（新任専任教員向け）：大学教員の職能開発と FD
 - (3) ファカルティ・ディベロッパー養成講座 in 京都
8. 2013 年度活動内容
9. 2013 年度大学 FD 委員会

「学生がどのように学んでいるか」

「大学の授業がどのように学生にインパクトを与えているか」

これらは教育活動の改善に欠かせない情報ですが、これまで教員個々の経験に依るところが大部分であり、大学として学生全体を把握する施策を講じてきませんでした。

そこで、大学 FD 委員会では事業計画に基づき 2012 年度から検討を重ね、次の要領で学修行動調査を実施しました。

調査の目的	(1)本学の教育(カリキュラム、授業形態など)を検討するうえでの基礎データを取得すること (2)各種施策が学生の学修行動をどのように変容させたか、よい影響を与えているかという観点から実態を把握すること。
対象者	全学部生
実施期間	2013年9月20日(金)～9月30日(月)
実施方法	本学ポータルサイト(FerrisPassport)のアンケート機能を利用 後期履修登録システムと連動
回答率① (Q1～Q80)	51.9% (10月1日付在籍者数：2,571名 回答者数：1,334名)
回答率② (Q81～Q93)	33.0% (10月1日付在籍者数：2,571名 回答者数：849名)
設問の概要	(1)大学入学後の時間の使い方 (2)授業での経験 (3)学修への取り組み (4)授業に対する意識 (5)入学後から現在までの学修行動についての自己評価 (6)本学の教育への満足度
参考にした調査	①「全国大学生調査」(2007年実施) 東京大学 大学経営・政策研究センター2008 ②「一年生調査」「上級生調査」(2009～2011年)平成21年度採択文部科学省大学教育 充実のための戦略大学連携 支援プログラム 大学 IR コンソーシアム：同志社大学、北海道大学、大阪府立大学、甲南大学 ③「大学生の学習・生活実態調査」第1回(2008年)、第2回(2012年) ベネッセ教育研究開発センター

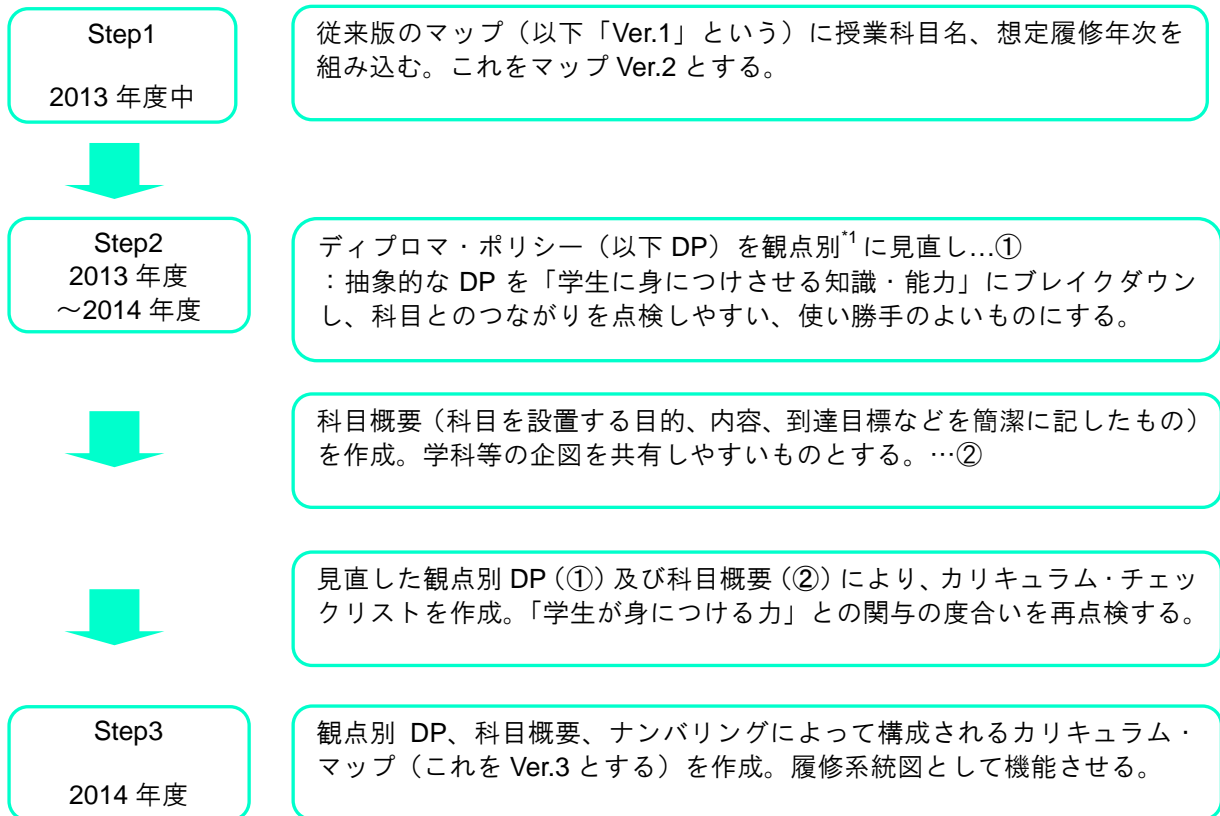
基礎集計結果と結果概要を、大学 FD 委員会(2014年1月15日)、大学教務委員会(2014年1月22日)、各学部教授会(2014年2月8日、9日)、大学評議会(2014年2月12日)に報告書として提出しました。今後詳細な分析を実施するとともに、個票データを公表可能な形で学内に提供する予定です。カリキュラム所管部署において活用されることを期待します。

2010年度より作成に着手し、2012年度からは学生要覧、大学公式サイトにカリキュラム・マップを掲載していますが、この段階では各カリキュラムが基本とする分野やゼミの概念図を表すものでした。

この現行のカリキュラム・マップに対して

- ・カリキュラム改革に伴い、整合性をとるために改める必要があること
- ・学生の履修・学修の指針となる地図（マップ）としての意味合いを高めるために、科目の関連、段階性を表す必要があること

といった課題が浮かび上がってきました。これは今後の検討課題であるナンバリングとも密接に絡むものです。そこで、2014年度に向け表示の仕方を抜本的に見直すこと、下記の工程により段階的に進めることとしました。



この計画に基づき各学部FD委員会、カリキュラム検討委員会などで協議を重ね、2014年4月には、文学部、国際交流学部、音楽学部のすべての学科でカリキュラム・マップ Ver.2という形にすることができました。

また、この過程で履修が望ましい時期を特定できない科目やカリキュラム内での位置づけ、選択の自由度を表しづらい科目など、いくつかの不都合、疑問が生じました。これらの発見は、順次性、体系性を問い直すうえで大きな意義があります。2014年度以降のナンバリングに向けては、ここでの発見を活かすこととします。

*1…「知識・理解」「関心・意欲・態度」「技能・表現」といった観点

日時：2013年10月30日（水）15:00～17:30

会場：緑園キャンパス 7201 教室

プログラム

第1部 講演会「学生が成長するプロジェクト学習～初年次教育と PBL～」

講師：山田 和人 先生（同志社大学 PBL 推進支援センター長、文学部国文学科教授）

第2部 各学部からの事例報告

文学部 藤本 朝巳 教授、国際交流学部 春木 良且 教授、

音楽学部 岡島 雅興 教授

司会：藤本 朝巳 教務部長（大学 FD 委員会副委員長）

対象者：専任教職員、非常勤教員

出席者：学長、教員 21 名（英文 1、日文 4、コミュ 0、国際 10、音芸 4、演奏 1） 職員 34 名

*登壇者 英文 1、国際 1、音芸 1 を含む。

講演会の目的

「プロジェクト学習」の目的、効果、種類（社会連携型、企業・地域からの課題によるタイプばかりではないこと）に関する認識を共有し、成立条件や留意点を理解すること。

実践例を参考に、本学のような小規模文化系女子大学での実施が十分に可能であり、学生の学習活動を活性化できることを理解すること。

概要（第1部）

■設置の背景～テクニク、ノウハウではない考え抜く力の育成～

山田先生から同志社大学プロジェクト科目の特徴について紹介があり、設置の背景として、学生の「情報処理能力は高いが問題発見・解決能力が弱い」ことへの対策に迫られていたこと、グループワーク中心の学習を通じた目標は各種スキルの修得に留まるのではなく、スキルを社会に対し総合的、創造的に運用する能力・モラル（良心）の涵養にあることなどが述べられました。

■自律を促すための仕組み1～人数と科目数の徹底したコントロール～

（友人と一緒にいった）安易な履修ではなく、本当に興味のあるテーマを選択できる契機を与えるために多数の科目（20～25科目）を開講しているそうです。開講にあたってはプロジェクトテーマを公募し、応募されたプロジェクト（毎年70件程度）の現実性、適切性や採用された場合に講師を委嘱することになる応募者の適否を厳正に審議し選定しているとのことでした。

また開講にあたってはグループが成立しかつ教員がコントロール可能なサイズであるクラス定員5名以上19名以下を厳守し、このなかで教員の役割を監督に留め、教えすぎずコントロールに注力することを第一としているとのことでした。

■自律を促すための仕組み2～競争的環境は必須～

プロジェクト科目には「決める」「つかむ」「深める」「伝える」「振り返る」5つのフェーズがあり、最初の3回が最重要でゴールの出来を決定づけること、期間が限定され、マニュアルがなく自分たちで考えなければ前進しない、情報共有と時間管理が必要、社会への発信など、学生の苦手な要素が多く含まれ、否応なく鍛えられることなど特性について説明されました。

「伝える」「振り返る」フェーズでは、成果報告の中間発表会、最終発表会が設定されており、どちらも合同形式により適度な競争的環境を用意していること、特に中間発表会では徹底的に追及し、かつ失敗から回復できる場としていることが語られました。このように「興味をもたせ、やらざるを得ない状況に追い込む」仕組みを多数用意した結果、日曜日開催・自由参

加の最終報告会には履修者 250 名のうち 200 名が参加しているとのこと。大きな事例としては、授業外学習が 1 年間で 1200 時間に達した学生がいたことが成果報告書から明らかになったそうです。

事例 1：同志社小学校との連携「小学生のための能楽入門プログラムの開発と研究」(2006)

事例 2：子どものための「京都職場図鑑」作成プロジェクト (2007)

■学科初年次導入教育への適用～興味から研究へ～

次に、山田先生のご専門分野で初年次教育「基礎演習」でも同様の展開が可能と考え、『仮名手本忠臣蔵』を題材にした検定問題作成を取り入れた事例の報告がありました。

国文学科には「読むこと」が得意、好きであるという学生は多いものの、「研究」とは必ずしも結びつかない。『忠臣蔵』は、未知と既知のバランスが絶妙で、切り口が多様で自分との接点を見つけやすい点で最適な教材。検定問題作成を通し、正確な読解、表現、調査、プレゼンテーション力などの運用能力伸長を目標とする。

2 回目の授業では翌週までの教材読破を求め、読了していないとチームテーマ決定に加われないとし、3 回目では先輩事例の閲覧のみ認めるなど、情報を与えずに学生を追い込むこと、授業時間内にはディスカッションを完了させず、分業可能な課題にしないことで授業外のミーティング必須という状況をつくること、授業時間は 20 分単位で区切り、うち 3～5 分を講師からの指導、助言に当て、残りをチームの対話時間とするなど緩みのない配分とする。ワークショップ「山田タイム」によりチーム運営やスケジュール管理のコツを掴ませる工夫を随所に組み込む。

当初は和室という柔軟さを兼ね備えた場所であったが、一般教室でも出席者分の椅子・机のみを残し、講師の動線を確保すること、助言を得たいチームは講師用の椅子を用意し、学ぶ姿勢を示すルールを課すことなど、アクティブな空間の演出は可能である。

さらに、プロジェクト学習を支えるデジタルポートフォリオの有用性として、日常的でスムーズなリフレクション（振り返り）とフィードバック、共同学習の促進、メンバーの帰属意識や自己評価などが挙げられました。学習支援 SNS への投稿数は中間発表期に最多となるものの、最後まで低調な場合もあり、全チームが活性化するとは限らないこと、学生からの投稿に対し、担当者からのコメント件数は 1/4 程度、簡潔な内容で十分であることなど、数値を交えた解説がありました。

■そして評価力を備えた人物へ～学生自身による自己評価は驚くほど正確～

まとめとしてプロジェクト学習の成功要因を掲げられましたが、その中でも教員は教えすぎず見守り役となること、学生の成長には信頼し合い、安心できる環境で期待されることや悩む時間が必要なこと、自己満足に終わらせない、社会性の獲得を重視することなどが印象的でした。

最後に、成績は学生による総合的自己評価であること、自己評価シートからは学習時間やチームへの貢献度、学んだこと、将来に与える影響、チームとしての成果、自らの活動について驚くほど客観的・的確に表現する力が読み取れることが報告されました。

山田 和人 先生



ほぼ満席の会場：参加者が熱心にメモを取っていました



概要（第2部）

事例①：ミニインターンシップ～社会の教育力を活かす～

文学部からは藤本朝巳教授（教務部長）より、数年来の傾向として真面目に学ぶだけでは就職内定を得られない学生が増え始めたこと、講義中心の授業形態では打開できないと考え、ゼミ生には出版社や障がいのある児童向け学習塾との現場を体験できる機会を与えた結果、編集者や子ども対象の英語教員としての就職に結びつくなどキャリア形成に好影響があったことの事例報告がありました。

事例②：～周到に準備された学びの空間で異質に出会い成長する～

続いて国際交流学部からは春木良且教授より、「社会連携型 Project / Problem Based Learning ワークショップの経験から」として報告がなされました。文科系学生には「ものづくり」と「共同作業」の経験が乏しく苦手という特徴があり、学内は同質性が保たれやすいこと、3年次後期以降の就職活動で企業に感化されて大学での学びを軽視する学生が多数いるとの前提に立ち、大学の社会貢献を探求するプロジェクトワークを課すようになったとの経過説明がありました。



カラオケ産業が寡占状況にあることを踏まえた上で、「うたスキ」（通信カラオケと連携した会員制 SNS ウェブサイト）の新たな楽しみ方を提案するという事例をもとに、チーム形成から課題設定、中間、最終発表の流れ、他大学との競争や学外スタジオ利用など学びの空間がもたらす有効性が述べられ、企業に大学名や女子大生ブランドを消費されないこと、学生には思い出程度に留まらせないことなど留意点も強調されました。

さらに、「Analysis（分析型）」よりも「Design（設計型）」の課題の方がPBLに適していること、知識を蓄積してゴールに向かうのではなく、ゴールに到達するために必須の知識や方法を修得していくことなど特性について解説されました。

なお、本学には学びのコミュニティを形成しうる施設、設備が十分ではないこと等、物理的な学びの場を与えることの重要性が指摘されました。

事例③～さあ、カタチにしよう～

音楽学部からは岡島雅興教授より、音楽芸術学科専門科目「キリスト教音楽基礎」（講義題目：賛美歌を創ろう）について紹介されました。

まず冒頭で賛美歌「きいてください、神よ」（作詩・作曲 吉松佑莉）が鑑賞され、讃美歌 F プロジェクト*との関わり、開講時の社会情勢（東日本大震災の影響）など背景の説明がありました。

学生に音楽表現で社会に貢献したいという意識が広がったこと、音楽経験、習熟度も多様な履修者それぞれに適切なゴールを設定したこと、学生が創作したメロディーを元に共同作業で完成させ、授業内で発表などが成果として語られました。

そして、これらの成果は2011年度から毎年度歌曲集として発行、フェリスコンサートやベアリックリビングコンサートなど演奏の機会を設けるなど形として残し、展開してきたこと、形になったときの学生の様子に手ごたえを感じたことなどが報告されました。



*創立140年記念行事として発足。オリジナルの新しい賛美歌を作り、学内で歌い広めようという全学的プロジェクト。

第3部 総評・コメント

山田先生からは、事例②については他大学との競争機会、切磋琢磨する環境が用意されており今後の課題も明確であること、学生間の議論、情報共有に直接のミーティングと Facebook が効果的に用いられたと窺われること、ゆとりと快適さを備えた空間がなくても学びの場を創出する方策はあることなど助言をいただきました。

事例③については、発表や歌曲集の発行を最終目標とするのか、学生は何ができるようになればゴールであり成功なのかを教員と学生で議論することや、個人の創作を重視しながら共同学習とする意義を確認できるとさらに学びを深化できること等コメントがありました。

4 大学院のFDをまずはここから

自己点検・評価委員会からの報告を受け、FD委員会では次の課題を改善すべき事項として5月から着手し、翌年1月に3研究科とも完成させることができました。

学位論文審査基準の明示

各専攻で運用されてきた、修士論文、博士の学位申請論文について審査基準及び審査体制を明文化し、2014年度履修要項（大学院要覧）に掲載しました。また、同「大学院要覧」において、「予備論文」「予備審査」「副論文」「最終試験」などの用語を改めて定義し、課程修了時に求められる到達度をわかりやすいものとししました。

カリキュラム・ポリシーに基づくカリキュラム編成の説明

ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーは2010年度に制定され、これに基づくカリキュラム編成がなされてきました。しかしながら、肝心の学生への説明が十分でない状態でした。各研究科、専攻設置認可申請、届出時の「設置を必要とする趣旨・理由」を参考としながら、最新のカリキュラムが想定する人材像を改めて言語化し、ディプロマ・ポリシーとの繋がりを理解できるよう大学院要覧に明記しました。

期 間：

〔前期〕2013年6月10日（月）～6月21日（金） 〔後期〕11月11日（月）～12月2日（月）

対象科目：専任教員担当科目

対象者：専任教員

参観した教員／参観を受けた教員： 〔前期〕 8名／12名 〔後期〕 7名／10名

2012年度にスタートしたこの取組みでは、専任教員担当科目すべてを対象、事前予約不要、参観報告書は「よかった点」「自分の授業に取り入れたいところ」を中心に記述することとして自由度の高いものとなりましたが、参観者の幅が広がらず、観察ポイントが定まらないという課題がありました。

そこで、2014年度に向けて下記のとおり目的を再確認のうえ、実施要領を改訂しました。特に「初年次教育科目」の参観を推奨し、2013年度に引き続き、初年次教育をFD活動の中心に置く一貫性をもたせることとします。

2014年度実施要領（予定）

活動の目的

- (1)他の教員の授業を参観することにより、自身の教授法、教材改善のヒントを得ること。
- (2)相互の参観により、情報交換やアドバイスを受けられること。
- (3)有効な取組みを共有し、同一科目（複数クラス展開）の運営やカリキュラムの体系化に役立てること。

対象科目

専任教員担当科目のうち、初年次教育科目を中心とする

2014年度FD活動計画の主要テーマ：初年次教育に焦点を当てる。

観察ポイント

次の視点を参考に、報告書を作成する。

- 学生への関わり（学生の参加を促すための工夫）
- 学生の集中度
- 課題設定（自己学習、授業外学習の促し）
- 授業の展開方法（時間配分、要点の確認、聞き取りやすい話し方）
- 教材の内容・工夫（テキスト、配布資料、取り上げる事例、板書、レジュメ等の効果）

2010年度後期以降、「授業に関する中間アンケート」は、学生からの意見を授業改善に活かすこと、アンケートを教員とのコミュニケーション手段とすることを目的とし、Web方式にて第7週～第8週に実施しています。

Web方式にしたことに伴う回答率の低下については、全学生にメールを配信する、授業時間の一部を利用できるよう教員への協力を呼びかけるなど改善策を講じましたが、めざましい効果は出ていません。

さらに、2013年度学修行動調査、藤本大学FD副委員長（教務部長）の学外セミナー参加を経て、「授業に関する中間アンケート」は実施方法の工夫というレベルではなく、目的から見直すこととしました。

つまり、授業アンケートは、各授業科目の点検（実態調査）ではなく、カリキュラム改善の観点から「学生がどのように学んでいるか」を知るための調査に転換するということです。

学修行動調査（2013年9月実施）では、「学生の自己評価」（Q64～Q80）、各カリキュラムへの満足度（Q81～Q87）により、科目群単位での影響をみることができました。2014年度以降授業アンケートでは、この各「科目群」というマクロの単位から、各「科目」というミクロの単位で、本学の教育活動が学生に与えている効果を把握する手がかりとし、活用したいというねらいがあります。

学修行動調査Q89「教員と話をする、意見を交わすなどコミュニケーションをとる機会」の結果は、カリキュラム・ポリシーに掲げる「自主性と双方向性を重視した少人数教育」の達成状況としては必ずしも高くありません。

レスポンス・シートやポータルサイトの利用による課題提出など、教員と学生間のコミュニケーションの手法は多様化しています。したがって、Web授業アンケートそのものに「教員とのコミュニケーションツール」という目的をもたせるのではなく、授業における双方向性がどのようにはかられているかを問うこととします。

2014年度の実施方針は、下記のとおりです。

- (1)どのように教えているかという視点での実態調査ではなく、学習活動（学習者自身が振り返ること、科目が学習者に与える影響）に重点を置く。したがって、無理なく「振り返り」のできる時期に実施することが望ましい。
- (2)設問数は、目的を達成するうえで最適な5問程度に精選する。
- (3)従来の授業アンケートで調査項目としていた授業改善についての要望、意見についてはアンケートとは区別し、授業期間中を通じ受け付ける仕組みとする。

私立大学連盟主催の FD 推進ワークショップにはこれまで継続して参加してきていますが、今年度も下記のとおり、専任教職員向け、新任専任教員向けのそれぞれに参加しました。

また今年度は初めて愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室主催のファカルティ・ディベロッパー養成講座に参加者を派遣しました。2泊3日という期間からもわかるように、大きなボリュームであることはもちろん、他大学とのネットワークづくりもできる非常に充実したものでした。本講座については2014年度以降も引き続き参加者を派遣し、本学のFD活動については教育活動の充実に役立てたいと考えています。

	プログラム名	参加者	主催・期間	会場
1	平成 25 年度 FD 推進ワークショップ (専任教職員向け) 学生の学びを促す学修支援と FD・SD ～教職協働による大学教育の質的転換～	木曾 順子 (国際交流学科教授) 小林 裕子(教務課係長) 吉川リツ子(教務課係長) 鈴木 綾乃(教務課主任)	私立大学連盟 6月22日(土)	市ヶ谷
2	平成 25 年度 FD 推進ワークショップ (新任専任教員向け) 大学教員の職能開発と FD	古内 洋平(国際交流学 科准教授)	私立大学連盟 8月7日(水)～8日(木)	浜松
3	ファカルティ・ディベロッパー養成講座 in 京都	藤本 朝巳(大学 FD 委 員会副委員長)	愛媛大学教育・学生支援機 構教育企画室 10月4日(金)～6日(日)	京都

報告 1 「私大連FD推進ワークショップ」参加記録

木曾 順子

2013年7月2日

プログラムは、(1)問題提起、(2)グループ討議、(3)総括の主に3部構成であった。それぞれについて簡単に内容と感想(有益と思われた点等)を述べたい。

(1) 問題提起

2つのプレゼンテーションが行われた。1つは若松正志氏(京都産業大学、教学センター長兼キャリア教育研究開発センター長、文化学部教授)による「産学協働教育による学士課程教育の質的転換」である。ここでは、大学教育の質的転換の始点は学修時間の増加であるとの理解に基づいて、中でも学修支援環境の整備に焦点を絞り、報告が行われた。つまり、学修時間の増加については学力向上のためには、一方で高校、他方で社会・企業との関係を視野に入れて学士課程教育を考える必要があるというものである。そこで京都産業大学のキャリア教育＝産学協働の実態が取り上げられ、多様なインターンシップ・プログラム、企業人と学生が協働で学ぶ授業などが紹介された。企業の協力を得るのは容易ではないだろうが、企業人と学生が協働で学ぶ授業は非常に興味深い取り組みと思われる。

2つめのプレゼンテーションは、安納隆介氏(法政大学、学務部教育支援課学習環境支援担当)による「ピア・ネット～部局連携で広がるピア・サポートの輪」であった。正課授業とサークルに次ぐ第三のコミュニティ形成が必要との認識から、法政大学では2009年に学習環境支援センターを立ち上げ、学生の主体的学習をハード・ソフト両面で支援する体制を整備してきたという。例えば、正課外教育プロジェクトや学習ステーションの運営等で、後者の例として、ランチパック・プロジェクト、るるぶ・プロジェクト、ピアネットガイド等が挙げられた。学生の参加を促すうえで重要なことは、取り組みの成果が形として残ることや評価されることだという点は同感である。HPへの掲載や、成果物がコンビニに置かれることが、参加学生に達成感を抱かせ、また正課外活動が社会に繋がることを実感させるとの指摘もそのとおりで、本学の正課外学修プロジェクトでもこうした仕組みが求められるかもしれない。

(2) グループ討議

グループ・ディスカッションのテーマは「学修時間の増加・確保」であった。検討状況や整備の

現状について参加大学間で意見交換が行われた（Jグループ：7大学からの参加者+担当2名）。本学の取り組みとして取り上げたのは別紙のとおりだが、グループ内他大学からは、かなり多様な取り組みを行っているとの印象をもっていたようだ。なお、討議終盤で各大学に共通する問題として挙げられたのは、①プログラム実施のための財政上の制約、②学修の質・量確保に対する教員間の温度差、③正規・非正規の学修支援の取り組みに、意欲の劣る学生をいかに巻き込んでいくか、等であった。ただし③については、本学の場合、学生数に比して正課外プロジェクトが多様に存在するため、参加者層の幅は比較的広いとの印象をお話した。

(3) 総括

グループ・ディスカッションの内容が報告された。

2013年8月30日

2013年8月静岡県浜松市に於いて開催された私大連の新任専任教員向けワークショップに参加して、気づいた点を簡潔に報告する。

1. アクティブラーニングの常識化

- 参加したほぼ全ての新任教員のあいだで、従来型の一方通行講義の限界や弊害、また、学生が能動的に学べる環境を作ることの重要性が共有されていた。
- したがって、ワークショップでの論点はアクティブラーニング導入の是非ではなく、(導入するのはもはや常識であって) いかにして自分の担当科目に適した手法を見つけ出すかという点にあった。
- また、学生から支持されない従来型の講義を続けている教員に対して、多くの新任教員は非常に厳しい目を向けていることが分かった。このことは本学内でも共有しておく必要があるのではないかと。

2. アクティブラーニングの多様性

- ひと口にアクティブラーニングといっても、その手法は実に多様である。教員は、受講者の数、対象学年、学問領域等に応じて、最適な手法を選択しなければならない。そのためには、(〇〇のような授業形態では、△△のような手法が効果的であるといった) アクティブラーニングのメニュー化が望まれる。
- 定期試験問題（論述形式）を学生から募集するとか、ある概念や理論を説明するための事例を学生に選択させるなど、学生の能動的な授業参加を促すには実に様々な方法があると気づかされた。教員の創意工夫が不可欠であるが、その分、負担は増える。教育・研究・校務のバランスに苦慮している教員が多かった。
- 他方で印象に残ったのは、アクティブラーニングといっても何か斬新なことや手の込んだことをやる必要はなく、授業に“ちょっとした変化”を加えるだけで学生の態度が大きく変わるという点である。例えば、講義中に教員が教室内を歩き回るだけでも、学生の注意を引くことにつながる。

3. ときどき「学生に戻る」ことのススメ

学生役として6つの模擬授業に参加した。ノートテイクに集中すると話を聞きそびれてしまったり、疲れているとなんとか意識がどこかに飛んでしまったり、話の途中で理解できなくなるとその後の授業を聴く気が失せてしまったりと、学生時代に戻って授業を聴くのは案外重要だと感じた。授業を受ける学生の立場を体験する機会を意識的に作ることが、自己の授業の改善につながるだろう。

2013年10月9日

京都での3日間、20時間に及ぶ研修会であった。大変ではあったが、とても内容の濃い、充実した研修会であった。以下、簡単に報告したい。

[1日目] FD活動の振り返りとFDニーズの把握

まずは、各参加者がFD活動を振り返る時を持った。続いて国立教育政策研究所の川島啓二氏によるレクチャー「高等教育開発の意義と可能性」を受け、高等教育開発の意義を確認し、また日本の大学が抱えている課題を自覚、共有し、大学教育が質的に転換するための可能性を教示していただいた。午後より、【ワークショップⅡ】「ニーズに対応したFDプログラムの開発」に参加した。参加者はグループに分かれ、各大学の抱える課題を話し合い、材料を提供し、FD開発のための研修会（ワークショップ）案を作成した。（教員が学生の汎用的能力を高めるための授業を行えるような研修を企画実施する）この件については、後日、報告したい。

[2日目] ミクロ/ミドル・レベルのFD活動

「ミクロ・レベルのFD/授業アンケートの見直しと活用方法」に参加した。午前中前半は、井上史子・山内尚子・佐藤浩章子各氏によるレクチャー、後半と午後は授業アンケートを改善するためのワークショップを行った。午前中は、授業アンケートの現状、見直し、問題点などを学習、共有した。ワークショップではグループに分かれ、授業アンケートを改善するために、各大学の抱える課題を提供し、アンケートの実施方法と活用法を探り、モデル案を作成した。参加大学のアンケートの実例をいただいたので、今後の参考にしたい。

なお、詳しくは後日報告したいが、全国的にアンケートは行き詰まっているよう（回答率が芳しくない、活用できていない等）で、今後は、教師の授業を評価し、改善するというだけでなく、むしろ、学生が今、何を、いかに学習しているか（学生の実態）をよく知るための項目にし、学生と教師が対話するような形で、授業を改善することが肝要であろうと思われた。

改善案

全科目、アンケートを取る必要はない。数を減らすことで、アンケートの質を高める。

例えば、一人の教師が1教科（1授業）を選定し、責任をもってアンケートを取る。そして、結果を自身でしっかり分析し、報告書を作成し、なるべく早くアンケートに協力してくれた学生に回答する（フィードバックする）。

活用するためには、アンケートをFD委員等がチェックし、もし結果の極端に悪い授業があれば、原因を探り、相談する（コーディネーターとして）。そして担当者が改善できるよう、協力する。

ただし、授業評価を勤務評定にしないよう配慮が必要である。

また海外（アメリカ）での前例をいろいろと提供して下さり、アンケートを取る委員としての学生を交えて、アンケートを取っていくことの有効性を教えていただいた。）→ 学生とともに、良い授業環境を作っていく。

[3日目] マクロ・レベルのFD活動とアクションプランの作成

はじめに、全体会で二日間の報告し、その後、川島啓二・佐藤研二・岡田雄介・小林直人各氏からレクチャー（各大学の取組と実例）を受けた。多くの大学で、教学マネジメントがいかに組織され、実行されているかを学ぶことができた。さまざまな組織の組み方と工夫があることがわかり、今後、当大学で共有し、活用できればと思う。

3日間の研修を振り返って、FD関係の活動として、特に以下のことを記しておきたい。

1. 授業アンケートの意義を確認し、見直しの方向性が見えたこと。
2. 当大学での今後の研修会の必要性を感じた。FD委員会に提案し、企画・実施したい。
3. 教学マネジメントについては、改善のための資料や人脈を得ることができたので、順次、報告したい。

※ 今後は、重要性和優先順序を考慮し、タイム・スケジュール（中期計画）に合わせ、常にFD活動を見直しながら、大学グランドデザインへ反映できればありがたいと思っている。

以上

期間	テーマ、トピック	主催
5月~7月	学修行動調査の検討、設計	大学 FD 委員会
5月23日(木)~6月10日(月)	前期 Web 授業アンケート実施	大学 FD 委員会
6月10日(月)~6月21日(金)	専任教員による授業参観	大学 FD 委員会
9月20日(金)~9月30日(月)	学修行動調査実施	大学 FD 委員会
9月28日(土)	2013 Ferris English Teacher's FD Workshop	英語教育運営委員会
10月	学修行動調査結果報告(速報)	大学 FD 委員会
10月30日(水)	FD 講演会	大学 FD 委員会
10月~1月	大学院の FD:学位論文審査基準	大学 FD 委員会 各研究科
10月~1月	大学院の FD:カリキュラム・ポリシーに基づくカリキュラム趣旨説明	大学 FD 委員会 各研究科
10月~1月	カリキュラム・マップ Ver.2 作成	大学 FD 委員会
10月	2013 年度後期~2016 年度中期計画策定	大学 FD 委員会
11月6日(水)~11月20日(水)	後期 Web 授業アンケート実施	大学 FD 委員会
11月11日(月)~12月2日(月)	専任教員による授業参観	大学 FD 委員会
11月	シラバス執筆要領の改訂	大学 FD 委員会
1月	学修行動調査集計結果報告	大学 FD 委員会

	開催日	主な議題	
第 1 回	5 月 8 日 (水)	■学修行動調査の実施	
第 2 回	7 月 10 日 (水)	■前期授業に関する中間アンケート実施報告 ■専任教員による授業参観報告 ■学修行動調査の実施	
第 3 回	10 月 9 日 (水)	■学位論文審査基準の明示 ■科目概要の作成 ■カリキュラム・マップの見直しと詳細化 ■大学院カリキュラムの趣旨説明 ■学修行動調査実施報告(速報) ■FD 講演会の実施 ■セミナー参加報告	
第 4 回	11 月 13 日 (水)	■FD 講演会実施報告 ■2013 Ferris English Teacher's FD Workshop 実施報告 ■2014 年度シラバス執筆要領 ■2013 年度後期～2016 年度活動基本方針	
第 5 回	1 月 15 日 (水)	■学修行動調査集計結果報告 ■カリキュラム・マップ Ver.2 作成結果 ■学位論文審査基準 ■大学院カリキュラムの趣旨説明 ■後期授業に関する中間アンケート実施報告 ■専任教員による授業参観報告 ■2014 年度 FD 講演会企画	
第 6 回	3 月 12 日 (水)	■2014 年度 FD 講演会企画 ■2014 年度授業アンケート実施方針 ■2014 年度授業参観実施方針	